2026.5.23　No. 96

文教大学の授業

文教大学教育研究所
埼玉県越谷市南荻島3337
℡ 048-974-8811 〒343-8511

やってみせ 言って 聞かせて させてみせ ほめてやらねば 人は動かじ：国語科教育

教育学部　　藤森　裕治

15年間の高校国語教師、20年間の国立大学教員を経て、2020年度より現職。専門は国語科教育・幼児教育・日本民俗学。現在、全国大学国語教育学会理事長、中央教育審議会教育課程特別部会国語WG委員、Eテレ「現代の国語」・NHKラジオ「文学国語」講師、光村図書小学校・中学校国語教科書編集委員、大修館書店高等学校国語教科書編集委員等を務める。趣味は旅行とムーミン。近著に『国語科における中核的な概念とは何か』（東洋館出版社，2025）がある。

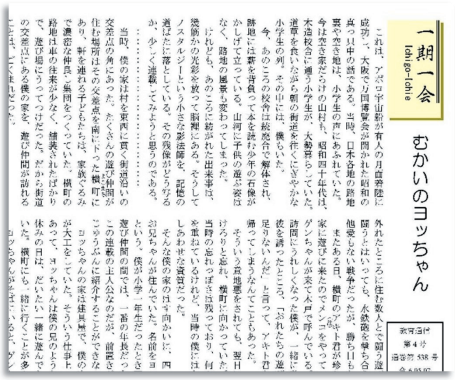
（ふじもり　ゆうじ）

幼小接続を視野に入れた子供の発達について、ことばの学びと育ちに焦点を当てた授業を担当しています。講義系では「教科概説『国語』」、「幼児と言葉」、「国語科教育」、「保育内容『言葉』の指導法」、「教科・教材論」、「教育実践研究」などがあります。パンフレットでは、これらの授業を貫いて行っているささやかな取り組みを紹介します。

はじめに

やってみせ　言って　聞かせて
させてみせ
ほめてやらねば　人は動かじ。

連合艦隊司令長官だった山本五十六の名言として、人口に膾炙しています。つたない授業だったと反省しながら研究室に戻るとき、我が身を戒めることばとして唱えています。そんな毎日ですが、この名言を心に留めて行っている三つの心がけを紹介します。



一期一会
Ichigo-Ichie

むかいのヨッちゃん

これは、アポロ宇山彩が育人の月曜塾に成功して、大阪でお開業前開れた昭和の真っ只中の話である。当時、日本各地の路地裏や空き地には、小学生の声にあふれていた。今は空き家だらけの山村も、昭和四十年代は、木造校舎に通う小学生が、大勢やってきていた。小学生の列。その中には、横いた。今、あのこの校舎は絵画合に解体され、路地には草が背負って本を読む年の石像がかしげて立っている。山河に子供の遊ぶ姿はなく、路地の風景も変わってしまった。

にれども、あのころに結ばれた出来事は、幾倫かの光彩を放って脳裡にあるが、そうしてノスタルジーという小さな影法師を、記憶の過ぎに落としている。その後使がどう写るか、少しく連載してみようと思うのである。

……

当時、僕の家は村を東西に貫く街道いの交差点の角にあった。たくさんの遊び仲間が住む場所はその交差点を南に下った横町にあり、軒を連ねる子どもたちは、家族ぐるみで濃密な仲良し集団をつくっていた。横町の路地は車の往来が少なく、縦横に入れたばかりで、遊び場としてうってつけだった。だから街道の交差点にある僕の家を、遊び仲間が訪れる

外れたところに住む数人とで朝ラジオ体操をしようとはいっても、水鉄砲を撃ち合う他愛ない戦争だったが、勝ち負けは、またある日、横町のアキト君が珍しい家に遊びに来たのでメンコをやって、ゲンちゃんが来たので人戸で呼んでいる。訪問にうれしくなった僕が、一緒に彼を誘ったところ、「おれたち遊び足りないんだ」と言って、アキトが帰ってしまうなんてこともあった。

そういう意地悪をされても、翌日行ったりと忘れ、横町に向かっていた。当時の忘れっぽさ当我っており、何を重ねているが行ったり、当時の僕にはしあわせな資質だった。

そんな僕の家の向かい、四お兄ちゃんが住んでいた。名前をヨという。僕が小学一年生だったとき遊び仲間の最年長だった。

この遊戯の主人公なのだが、前述ごっちゃんに紹介することができなかったヨッちゃんの家は建具屋で、僕の父が大工をしていた。そういう仕事上あって、オッちゃんは僕の兄のように休みの日は、だいたい一緒に遊んでいた。横町にも、一緒に行くことが多

教育通信

やってみせ：教育通信『一期一会』の発行

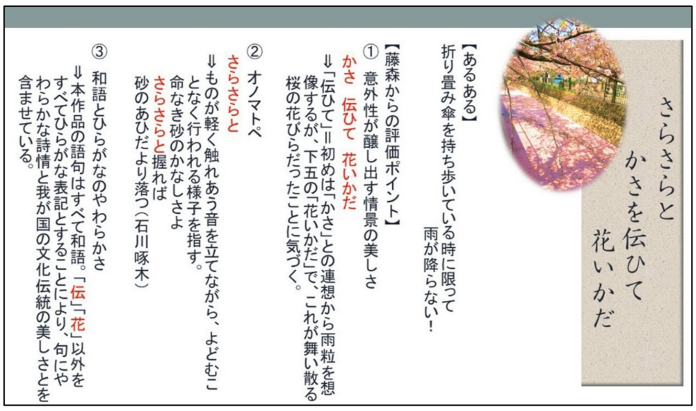
高校教師として初めて担任になった春から始めた学級通信を、大学でも続けています（コロナ禍の数年間を除く。週刊）。内容は、日々の雑感を1200字程度のエッセイに綴ったもので、ここ２年間は、私が小学生だった昭和40年代を舞台に、当時の子供たちのリアルな日常をシリーズ読み物にしています。すべての受講生と定期購読（無料）を希望された同僚、事務室のみなさんに配付しています。読むたびに感想を伝えてくる人、バックナンバーを大切に保管している人、連載の続きが気になって授業を休めなくなる人などが現れて愉快です。なお、大学で発行してきた通信は、この4月で通巻600号となりました。

通信を大学で発行し続けている最も大きな理由は、学生たちが教師となり担任クラスを受け持ったとき、定期的に教室の様子や雑感を通信として発行し続けてほしいからです。

この思いには根拠があります。数百名の保護者を対象にした聞き取り調査の結果です（若菜秀彦1998『対話型教師のすすめ』明石書店）。調査によれば、保護者が担任や学校への不信感を払拭するために有効なほとんど唯一といってよい活動が学級通信でした。学級通信とは、自分の子供がどういう学校生活

を送っており、担任はどういう人間なのかを知るためのいわば「ライブカメラ」なのです。

こうした学級通信の効用について能書きを並べ、奨励するのは簡単です。しかしながら、それでは人は動きません。まずは教師が「やってみせる」べきだと自分に言い聞かせ、はや40年が過ぎました。



創作俳句の発表スライド

させてみせ：俳句の創作と披講

ことばの学びにかかる学修には２つの側面があります。１つは、ことばの学びそのものにおける知識・教養の側面です。文学・言語学・教育学の専門知、環境の構成や授業づくりの方法論、教育実践場面の観察・分析・模擬演習といった授業コンテンツです。

これに対してもう１つは、授業そのものの学びを、学生たちがどのようなことばで行うかという側面です。講義を聴くのか、ペアで学び合うのか、グループで協働するのか、自宅学修の成果を持ち寄るのか……。ことばの学びは、如上の形態のどれを選ぶかによって、扱われることばの構造や機能が異なってくることに意識を向ける必要があります。

そのため、私の授業では、学生が自ら活動に参加してことばを発し、その成果と課題を省察することが大切な要素となります。特に、協働での学びを適切に進めるためのことばは、社会に出た学生たちの人生全体を通して生きてはたらくものとなります。

一例を紹介します。

「国語科教育」では、協働・反転学修による俳句の実作と披講を行っています。学生たちは４～５人でチームを組み、私が開発したB-Map（藤森2013『すぐれた論理は美しい』東洋館出版社）というワークシートを用いて俳句作りに取り組みます。

素材は、日常生活の「あるある」（例：行列に思わず並ぶ。訪ねてみたら定休日。）です。これに季語を付けて風情とユーモアのある作品を創作し、manabaに提出します。

披講では私が全作品をスライド（写真）で示し、チーム代表が句意や工夫点を発表してフロアと質疑を交わします。その際、コメンテーターとして、私がすべての作品に対して優れた点を３つずつ指摘し、プレバトの夏井いつきさんのような口調で賞賛します。

最後に全員で投票し、最も得票数の多かった作品のチームには「超豪華粗品（例：関西万博で１時間行列して買ったミャクミャク羊羹）」が贈呈されます。

ほめてやらねば：提出物への講評

私が文教大学に着任した2020年、大学はコロナ禍の緊急事態宣言で動きが止まっていました。授業はオンラインで行われ、出席は配信されたコンテンツにかかわるレポート課題の提出によってカウントされていました。私は、高校国語教師時代から、学生の提出物に講評を返すのはあたりまえのことだと思っていました。

しかし、問題はその量です。毎週のべ200、年間6000件を越える受講生全員のレポートに、評点とコメントを書き込んで返す作業は並大抵のことではありません。これを実行すべきかどうか。着任早々、葛藤しました。

結局、すべての提出物は1週間以内に30～100字程度の講評を添えて返すことを決意し、着任から現在に至るまで続けています。提出されたレポートには、それぞれの個性が現れて面白いです。ごくまれに、友人のレポートや生成AIの回答を使って提出する学生もいますが、私にばれていることをほのめかした講評を送ってやれば、二度とはしません。

そのような場合でも、講評は穏やかな語彙を用いて返すことにしています（例：「君自身の言葉をききたい」）。彼らが子供たちを評価する立場になったとき、肯定的で励ましとなる語彙をできるだけたくさん備えておく必要があると考えているからです。

おわりに

先の名言には続きがあります。

話し合い　耳を傾け　承認し
任せてやらねば　人は育たず。
やっている　姿を感謝で見守って
信頼せねば　人は実らず。

部下や子供たちの声に耳を傾け、彼らを信頼することの大切さが簡潔に説かれています。残り５年の大学教員生活となりましたが、この至言を胸に、もうしばらく、蝸牛の歩みを続けて参ります。